

近世後期日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容

大島, 明秀
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://hdl.handle.net/2324/2882>

出版情報 : 洋学. 14, pp.1-32, 2006-03. 洋学史学会
バージョン :
権利関係 :



近世後期日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容

大島 明秀

近世後期日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容

大島 明秀

はじめに

近年、近世日本のいわゆる「鎖国」体制について活発に議論が交わされ、現在では、荒野泰典の提唱した「海禁」政策と東アジアの華夷秩序から近世を捉えなおす見解が有力となっている⁽¹⁾。荒野の指摘によって、体制としての「鎖国」は不在であったという認識が定着しつつある。しかしながら、現在までの「鎖国」研究の成果は、体制としての「鎖国」は不在であったとする一方で、「鎖国」は何者であるかという問いに十分に答えきれていない。問題の所在は、「鎖国」研究が体制としての側面からのみ考察され、言説として捉える視点が不在であったことにある。体制としての「鎖国」が不在であるからこそ、徳川体制を「鎖国」と表現してきた歴史的事実の存在は興味深い。

「鎖国」という言葉は翻訳語として創出された⁽²⁾。ケンペル (Engelbert Kaempfer) 一六五二～一七二六 原著、志筑忠雄 (一七六〇～一八〇六) 訳『鎖国論』⁽³⁾ (一八〇二) がその元である。よって「鎖国」という概念の普及・

定着を論じるにあたって、言葉の淵源である『鎖国論』の受容相を追究することは、有益かつ不可欠な作業となる。

志筑忠雄訳『鎖国論』の受容について、高須芳次郎は、平田篤胤（一七七六～一八四三）が鎖国攘夷論のために活用したと論じた⁽⁴⁾。板澤武雄は、黒澤翁満（一七九五～一八五九）は皇国思想の宣伝に用いたとした⁽⁵⁾。小堀桂一郎は、平田篤胤は国粹主義的利用に、黒澤翁満および横井小楠（一八〇九～一八六九）は蘭学者に惑わされている世論一般の叱責に用いたと述べた⁽⁶⁾。河原宏は篤胤が神国思想の補強に使用したと指摘した⁽⁷⁾。これらの研究上の問題点は、一人もしくは少数人（特に平田篤胤、黒澤翁満が多い）における『鎖国論』受容についてのみ論じられたことである。

次に、翁満および篤胤が鎖国思想と神国思想を定着させ、それが幕末維新期の尊攘論へと展開されていくと演繹的に述べた岸本覚の論は、その論理展開と証明方法に実証性が乏しい⁽⁸⁾。また、平石直昭は、『鎖国論』が政治動向に与えた影響について考察し、幕末の西洋と日本のいわゆる開鎖折衝の際の共通した議論の土台となったと述べたが、管見によれば、政策決定者が『鎖国論』を用いた形跡は認められず疑問の余地が残る⁽⁹⁾。岸本および平石の問題点は、論理の飛躍と、論理を裏付ける資料的な実証性に欠けることである。

本稿で掲げた全ての先行研究に共通することは、様々な人々による志筑忠雄訳『鎖国論』利用の様相を究明することなく、加えて受容層の追究やその背景を考察することもなく、『鎖国論』は国粹主義的発言の典拠、鎖国攘夷論の根拠、もしくは開鎖折衝の議論の理論的土台として受容されたと結論づけてきたことである。

このような研究動向に対して山崎勝昭は、近世後期における知識人の志筑忠雄訳『鎖国論』への言及を収集したが、記述の集成のみに終わりそこから論を立てることはなかった⁽¹⁰⁾。拙稿『異人恐怖伝』に見られる国学者

黒沢翁満の『鎖国論』受容⁽¹¹⁾では、志筑忠雄訳『鎖国論』を出版した黒澤翁満の意図が、いわゆる攘夷運動の主唱のためとこれまで指摘されてきた動きに対し、いわば学問のレヴェルで、世に満ちた「西洋風」を排除し、「和魂の鎮め」、すなわち世間に「和魂」の確立を促すためであったと論じた。また、「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学⁽¹²⁾」では、国学者間での『鎖国論』の読まれ方、日本賛美資料としての用いられ方を追究し、加えて『鎖国論』を資料として利用する方法が広まった背景を、平田国学の普及との関連から明らかにした。

本稿の課題は、成立以降普及していく志筑忠雄訳『鎖国論』が国内でどのように読まれ用いられたのか、その様相を詳細に追究することである。『鎖国論』が近世後期の体制や政策にどのような影響を与えたのかを考察するのではなく、いわば「鎖国」なる言説の形成過程を明らかにする基礎的作業の一つとして本稿は位置づけられる。

一 十九世紀日本における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容

元禄三（一六九〇）～一六九二にかけて滞日したケンペルは、離日、そしてオランダ上陸後間もなくライデン大学で学位を取得した。その後一七一二年にラテン語で *Amoenitates Exoticae*⁽¹³⁾（＝『廻国奇観』）を著した。内容は主に中近東（ペルシャ）に関する様々な論文や、日本の植物についての論文であり、先ほど述べた学位論文の内容もその中に含まれている。この『廻国奇観』に納められた五本の論文のうちの二番目の論文の第十四章“*Regnum Japoniae optima ratione, ab egressu civium, & exterarum gentium ingressu & communione, clausum.*”⁽¹⁴⁾（＝「日本王国が最良の見識によって自国民の出国及び外国人の入国・交易を禁じていること。以下「鎖国論」とする。」）

が、いわゆる「鎖国論」と呼ばれる論文であり、もともとはラテン語で成立した。ケンペル死後、彼の原稿をもとに一七二七年ロンドンで *The History of Japan* ⁽¹⁵⁾（＝英語版『日本誌』）が刊行され、その附録として前掲の「鎖国論」も添えられた⁽¹⁶⁾。ヨーロッパで『日本誌』は好評を博し、一七二九年には仏語版、蘭語版が、さらに一七三三年には蘭語再版が刊行された。一七四七年には独語版も出版され、また、ケンペルの甥の原稿に基づいてドーム (Christian Wilhelm von Dohm、一七五一～一八二〇) が編集したいわゆるドーム版も、一七七七～七九年にかけてドイツで出版された⁽¹⁷⁾。ヨーロッパの文学者、哲学者、啓蒙思想家、百科全書派、ならびに来日したヨーロッパ人などが、日本に関する情報源として大いに活用するなど、『日本誌』はヨーロッパ各国で大いに受容された⁽¹⁸⁾。日本語で著された『鎖国論』とは、日本に輸入されたケンペル蘭書 *De beschryving van Japan* ⁽¹⁹⁾（＝蘭語版『日本誌』）の附録第六章⁽²⁰⁾を、元阿蘭陀稽古通詞志筑忠雄が享和元年に訳出した写本を指す。

もともとラテン語で成立したケンペル「鎖国論」は五章に分けられ論じられている。第一章では、日本が交通を絶っている政策をとっていることに対し、一旦は（旧約聖書に基づいて）原則論としての禁止を述べ、しかし現時点での日本がこのような政策を採ることは妥当であると提唱される⁽²¹⁾。第二章では、日本の隔絶した難航不陸の地理的位置づけが語られ、濱田兄弟がオランダ人ペーター・ヌイツ (Petro Nuits) を撃退した事例、蒙古を撃退した事例を挙げ、日本人の勇敢さを称えている⁽²²⁾。第三章では、日本の物産の豊富さが述べられ、さらに金属の鑄造技術、酒造、学問、尊崇な敬神の精神、内科医学、裁判の迅速さを挙げ、その文化・文明を称賛している⁽²³⁾。第四章では、神代の時代から権力争いが続いてきた日本が、（徳川時代に至って）政治体制と法の整備とともに平和を確立した。だが、キリスト教など不必要な宗教などの進入により、具体的には島原の乱により平和な日本が壊滅的に荒らされ、キリスト教者の迫害とポルトガル人を締め出すことによって平和を取り戻した経

過について述べる⁽²⁴⁾。最後の第五章は全体の総括で、現時点の日本は治世者である將軍綱吉 (Tsinajos) も名君であることから、海外との通交を絶っている政策は妥当であるとする⁽²⁵⁾。『廻国奇観』に所収されたケンペル「鎖国論」はこのような内容であった。

一方で、オランダ語版『日本誌』から志筑忠雄が翻訳した『鎖国論』は、上記五章の分類が省かれ、全ての章が続けて記されている。内容を分析すると、冒頭に日本が外国と不必要な通交を避ける政策を採っていることを、旧約聖書に基づいた発想から原則的には禁止であるとする旨を述べた後、(1) 地理的条件、(2) 経済的条件、(3) 文明的条件、(4) 民族・文化社会的条件、(5) 政治的条件という五つの条件を兼ね備えた現状の日本が、いわゆる「鎖国」政策を採っていることについて、このような条件付で妥当であるとする、「鎖国」体制の是認論であり、綱吉治政時の日本の讚美書である⁽²⁶⁾。さらに、翻訳過程で志筑忠雄による註釈や付記が加筆されている。これらはケンペルの観察に対する補足説明や誤りの訂正が多くを占めるが、時折志筑自身の価値基準（西洋への反感・嫌悪）から発せられたものも認められる⁽²⁷⁾。

このような内容を含んだ志筑忠雄訳『鎖国論』は、成立以降、以下の五種の読み方で受容された形跡が認められる。以下詳細に見ていく。

(イ) 天文学的知識の情報源として

江戸の蔵書家松崎慊堂（一七七一一一八四四）の日記『慊堂日曆』の中に、『鎖国論』についての言及が見られる。文政七年（一八二四）五月二日の項である。

太陽と恒星とは動かず 厄日^{やくび}は多く国人始めて発明す。太陽と恒星とは動かず、地球と五星とはともに回旋して、太陽の外に各一世界をなすと云う。西洋の天学は多くその説を主とす。鎖国論評に見ゆ⁽²⁸⁾

松崎慊堂は、西洋天文学において地動説が有力であるという情報を「鎖国論評」から得ている。具体的な該当箇所は不明であるが、天文学の知識の情報源として『鎖国論』を用いていることが分かる。

(ロ) 歴史資料として

過去の日本の歴史を確認する資料として、志筑忠雄訳『鎖国論』が使用された形跡が認められる。時の書物奉行近藤正斎(一七七一〜一八二九)『外蕃通書』「第六冊阿蘭陀国書一」にも志筑忠雄訳『鎖国論』が登場する。『外蕃通書』は文化五年(一八〇八)〜文政二年(一八一九)の間に成立したと考えられる文献であり、本書は江戸初期から中期までの幕府と諸外国の往復文書を各国別・編年順に収録し、そこに編者近藤正斎が考証を付した、いわば外交文書集である。

又按二此 御朱印ハ、蘭書ケンプルニモ載レ之、〔ケンプルハ元禄年中参府セシ医者ナリ、其医日本ノ事ヨリ、紅毛来舶ノ始末ヲ書セシナリ、長崎通事訳書アリ、鎖国論トイフ、〕⁽²⁹⁾

ここでは御朱印に関する事実確認が行われている。過去の日本の歴史的事項についての情報源として『鎖国論』

を用いていることが分かる。

豊後日田の儒者廣瀬旭莊（一八〇七〜一八六三）は安政四年（一八五七）に成った随筆『九桂草堂随筆』の中で、志筑忠雄訳『鎖国論』を用いて、鈴鹿の賊や戦国時代の歴史事項を確認している。

ケンブルカ瑣国論ニ、豊公ヲ寛勇、神祖ヲ神智ト称セリ。異国人ニテモ、善クイヘリ、我更ニ之ヲ続キ言
ンニ、信玄ハ梟雄、謙信ハ英雄、信長ハ姦雄、豊公ハ放快、神祖ハ叡哲ナリ、其長ヲ言ンニ、信玄ハ密、
謙信ハ鋭、信長ハ弘、豊公ハ大、其短ヲ言ンニ、信玄ハ譎、謙信ハ隘、信長ハ忍、豊公ハ縦ナリ⁽³⁰⁾

余年十七ノ時、博多ノ茶忠ト云ヘル賈人ニ逢ヘリ、其人既ニ五十餘、余ニ往年鈴鹿ヲ通りシ時、田村將軍ノ
祠ノ開帳アリ、將軍ノ衣服ノ様子、甚タ今ノ阿蘭陀人ニ似タリ、不審ナル事ト話セリ、後ニ瑣国論ヲ閲セシ
ニ、鈴鹿ノ賊ハ、西夷ノ人ノ由、然レハ夷人ノ像ヲ、茶忠誤リ□タタルナルヘシ併シ、田村丸^鹿ノ時、西夷ハ
僅ニ關ケタル位ニテ、既ニ航海ニ長シタルカ、不審ナリ⁽³¹⁾

明治維新後に皇学講師・文学講師となった石黒千尋（一八〇四〜一八七二）は、加賀藩に代々士えた家系に生
まれ、嘉永五年（一八五二）には明倫堂国学講釈御用を務めたが、翌年の米露来航に際しては、通商を主張する
ような側面もあつた⁽³²⁾。その著書『近世諸蕃来舶集』は、異国船の来日した歴史を様々な文献から編集したもの
である。

【○鎖国論に云、今魯西亞人が、大に其国を開て、北ハ氷海に界し、西は彼羅泥亜に通し、南ハ伯尔齊亜に通し、又遠く東方に向て、東西韃靼の地を合せて、「ネルトシンスマイ」と云る所に至りて、支那に通じ、又我北方の「カミシャーツカ」に至りて我に通ぜんとするが如きハ、我に在ても、新に疾を得たるに似たれ共、彼「カミシャーツカ」の地たるや、既に其本国を去事、二千里にして、又我国に於て、海を隔、蝦夷をへて、前後の弁利を得ず、且又彼が本国、外は都児格国トルコ、勢尔馬泥亜国セルマニア等の強大なるに對して、内は、諸都の変乱しばくにして、常に他事なければ、遙に其中を伸して、我如き志備堅固、上下和合の国に、寇せん事ハ、難きが中の難き事なるべし、是併し乍ら、古人所謂敵国外患の類なるべければ、蝦夷「カラフト」の地、又能治して、通商出入濫放ならん物にハ、彼か相逼らんも、又我国を守護する所以成べしと云り、鎖国論は、蘭人「ケンプル」成ル者、我国の事を議せし書なるを、忠雄なる者、享和元年の秋、釈書せし議論なり、享和元年ハ、此事起らん七年前也、国事に志ある人と見えたり、】⁽³³⁾

このように『鎖国論』は十八世紀後半から進出してきたロシアの南下の歴史についての情報源として使用されている⁽³⁴⁾。

(ハ) 海外の日本観を知るための情報源としての紹介

ある種の系統の『鎖国論』写本には、江戸の文人大田南畝（一七四九～一八二三）「読鎖国論」が序あるいは跋として付されている⁽³⁵⁾。南畝は、文化元年（一八〇四）近侍の奥原重蔵に『鎖国論』写本を書写させ、翌年（一八

○五) 役人として自身も長崎に出向き、志筑忠雄原本を用いて手元にある写本を校正した。「読鎖国論」はこの期間中に記されたものである⁽³⁶⁾。

国可鎖乎、則不可通其用、而易其物也、国不可鎖乎、則不可閉其物、而守其疆也、一啓一閉者、治国之要也、
「…」、極西檢夫爾、往來斯土、能記国事、能知国情、訳司志筑氏、能読其書、能解其語、訳為二卷、更名鎖
国論、使人知極西有斯書、不亦偉乎、吾嘗読明人日本風土記、及韓人海東諸国記諸書、嘆異域之人、而能通
吾国之事情矣、生斯土也、食斯祿也、徒眩異物、而遺用物、因循苟且、唯利是謀者、不亦可恥之大者乎、後
之君子、一読斯書、則其於憂国、万分之一庶乎、免乎素餐之誚、矣云爾⁽³⁷⁾

南畝は『鎖国論』から、国の「一啓一閉」が「治国之要」であることを知ったという。

松平定信（一七五八～一八二九）『秘録大要』（文化五年「二八〇八」）にも志筑忠雄訳『鎖国論』についての記述が認められる。この時定信は既に老中から退き白河藩政に専念していた。定信は、海外の日本観を知るために読むべき書物を『秘録大要』という随筆で列挙しているのだが、「第五鎖国論をみて蛮夷わが国の事をしる事如此なる事をさとりべし⁽³⁸⁾」と、その第五番目、すなわち緊急を要して読むべき文献として志筑忠雄訳『鎖国論』は位置づけられている。

その他、志筑忠雄訳『鎖国論』は、和蘭人ケンペルによつて著された（日本についての）文献であるとの資料紹介のような記述も少なからず見られる。備後福山藩医伊澤蘭軒（一七七七～一八二九）は、文化三年（一八〇六）長崎奉行曲淵景路に従つて長崎に同行したが、翌年『客崎随筆』を著し、その中で「鎖国論一卷そ極西檢夫爾の著する所なり和蘭訳司志筑忠雄なる者訳して鎖国論と名^ケし⁽³⁹⁾」と紹介している。

次に、江戸の国学者山崎美成（一七九六～一八五六）の随筆『海録』（天保八年「一八三七」）巻一三の四七に、

「鎖国論 世に鎖国論とて、和蘭人ケンプルの我邦のこと記し論ぜし訳書あり、その原本はマルチネットといひて、八冊これある由⁽⁴⁰⁾」という記述が見られる。山崎美成のいう「マルチネット」とはケンペル著書ではなく、オランダの牧師で教育者であったマルチネットによる四冊本『格致問答』(Johannes Florentius Martinet: *Katechismus der Natur, Weduwe, Loveringh en Allart, 1777-79.*)のことを指していると思われるが⁽⁴¹⁾、「八冊」が何の情報かを元としているかは不明である。この錯綜した記述から、美成は混乱した風説を情報源としてケンペル『鎖国論』に言及したのだと考えられる。山崎美成は、『鎖国論』を「我邦のこと記し論ぜし譯書」と記している。

江戸の文人曲亭馬琴（一七六七～一八四八）は、大変交友の深かった木村黙老（一七七四～一八五六）から『鎖国論』を貸借し、校訂書写した⁽⁴²⁾。この期間中に、宣長門下で没後春庭を助け後鈴屋社の運営に尽力した殿村篠斎（一七七九～一八四七）に手紙を宛てて『鎖国論』を評している。

（天保三年八月十一日付殿村篠斎宛馬琴書簡）

鎖国論之事申上候処、此御蔵□のよし。野老借用の本は誤字多く御座候、そのまゝには写させがたく候間、借用のむくひごゝろに校訂いたし、多く雌黄を施し候故、大ていはよめ候様に成候也、この書の原本の由来いろくものがたりあれど、憚あれば、しるしがたく候、ケンフルはえびす心にて 皇国至難の種□也と思ひしは笑ふに堪たる事ながら、一体の論は尤もなる事多く御座候、訳人後難をはぐかり、地理の弁などその外ども訳し不申候は遺憾の事に御座候、南畝の序かの人にしては至極宜く出来申候⁽⁴³⁾

馬琴は、志筑忠雄訳『鎖国論』の「ケンフル」が記した側面を重視しており、日本の事情について記された「一体の論は尤もなる事多く御座候」文献として読んでいる。

(二) 海外の日本賛美的文献としての紹介

前節(ハ)では、志筑忠雄訳『鎖国論』が、和蘭人ケンペルによる日本事情を記した文献であると紹介された、いくつかの例を挙げたが、日本賛美的文献として紹介した記述も認められる。

大坂の町人学者山片蟠桃(一七四八～一八二二)が著した百科全書ともいえる『夢ノ代』(文化元年「二八〇四」頃成、文政三年「二八二〇」跋文)の「地理第二」に、

「ホルランド」人「ケンフル」ノ説、世界ノ行程ヲ測ル。【「ケンフル」ナルモノ日本ノ図説ヲ作り、鎖国ノ論ヲソナヘ、大ニ我ヲ称讃ス。「ヲロシア」人コノ書ヲ尊ミ我ヲシトウ。】⁽⁴⁴⁾

という発言が確認できる。蟠桃は「鎖国ノ論ヲソナヘ」た西洋人「ケンフル」著書(おそらく蘭語版『日本誌』)を世界地理書として見ており、その中の「鎖国ノ論」は日本を「称讃」した論だと述べている。

三河吉田藩士で文化一四年(一八一七)に藩校時習館教授となった中山美石(一七七五～一八四三)は、三河新城藩江戸家老池田寛親が著した『船長日記』の文政六年(一八二三)四月十七日付跋文を残している。その中で志筑忠雄訳『鎖国論』は、次のように記されている。

皇大御国の、あだし国々にはこよなくまさりてめでたき事ハしも、すめらのおみくに上つ御代かみみよよりの書にも見へたるをば、何かは今さらにいはん、はやく新井翁、貝原翁などいひおかれ、又阿蘭陀おらんたの国人のかけるを訳したりといふ鎖国論といふ書にも、事にふれつゝそのおもふき見えたり、そは、あらはにほめたるにはあらねど、よく心を付て見るにはいちづるしきなり、されば近き世となりても、儒者などの中にも、物よくわきまへて心あるかぎりは、皆おなじ定さだめにぞものすめる⁽⁴⁵⁾

中山美石は「皇大御国の、あだし国々にはこよなくまさりてめでたき事」の根拠として志筑忠雄訳『鎖国論』の記載を挙げている。

岩見浜田藩に仕え、その後浪人となった国学者岡部春平（一七九四～一八五六）は『禁秘響』（天保十一年「一八四〇」城戸千楯序）の中で、

【なほ皇国のめでたきいはれを、外国よりたゞへいへるものかれこれある中に、西洋のケンプルといへるがかきたりし鎖国論ぞいとくはしき。近頃にてはこの書の事ハしらぬ人をさく／＼なかなめれど、ことのついでなればいふ】⁽⁴⁶⁾

と述べている。岡部春平のみた志筑忠雄訳『鎖国論』は、日本の「めでたきいはれ」が「外国よりたゞへ」られた書物、つまり日本賛美書であった。また、弘化三年（一八四六）自序『淤能碁呂島考』には次のようにある。

【阿蘭陀入貢船に乘来し、歐羅巴洲の蘇示祭亜国と云国人検夫爾、日本史と云書をかきて、世界第一の美壤たる事を称美しを、長崎の訳官志築忠雄と云へるが訳して、鎖国論と題せし書に、厭しきまで委く云ひたり、されど吾太古の消息を聊もしらで、王代一覽ばかりの不足書を信て記ためれば、えもいはぬ推量語して、非々しく癡々しき事も云述へてはあるなり、其尤を一ついはゞ、神武天皇の大御祖は、韃靼国より渡行て、開闢せし物にはあらずかと云るは、訳者が既弁たる如く、云にも不足なむ、按にこは、天孫降臨といへる事を、怪しく心得僻て、□量に方位を立、其国人等が、無人島を開闢する心となりて、云試つるなりけり、さこそ云へ、検夫爾程の篤志の学者に、古学に至深が、神典の正語甘美に読解為聴たらましかば、不二尋常一利益ならましを、いかにも埋没痛き事どもなりかし、さて其書中に、桓武天皇の大御代に、坂上田村麿君の、韃靼入寇の賊等を鏖にせさせましし事を記せり、こは余考して雑録に既いひつ、此には由なき事ながら、検夫爾が事の次第なれば云】⁽⁴⁷⁾

また、春平は『鎖国論』を、日本の「世界第一の美壤たる事を称美し」た文献とみている。成立年が不明であるが、おそらく横井小楠が開国派ではなかった頃に著されたと考えられる『読鎖国論』という小文がある。

読鎖国論

我邦孤峙東海中。得天地中物足人蕃。外焉有山海風濤之險。内焉有列国藩屏之固。雄視万国二千年矣。昔日蒙古拳十万軍来侵。一風濤淹滅之。爾後醜虜不敢萌覬覦之心者抑天之於我邦。非有独厚之者存焉哉。豊太閣

以雄大之見一切絶万国之通。当今之制因之。独許進港者清蘭二国。此二国我非修好結交。与書籍藥物有所需于彼。又非因其交通以窺察万国之動静。但二国之通久且謹故許而不絶者所以示我覆天之仁也。至近世和蘭学漸行有見泰西諸州沿革之勢。遽愕其戰艦火器之大且巧。動以魯西細亞^{ロシヤ}諸厄刺^{アイギリス}等吞并之事虚喝我邦人。是其人眼無淵識胆落虚声安知天下之勢。天下之勢不唯我有眼者能知之彼泰西人既已知之。乃如檢夫爾^{ケンフル}鎖国論。窺我山海之險絶見我士氣之剛銳。知我土地所產之百物自足而極服我鎖国卓越之見也。蓋泰西諸州大抵襟帶相接猶我七道。不得不交互爲生。是彼之与我所以同球而殊地也。故在彼開通爲道。在我閉鎖爲道。各得其所宜而後謂之順天。夫民所賴以爲生者天也。天之所賦既殊地則治法亦不得不殊是檢夫爾之所論而各非所以安斯民之道哉。不唯檢夫爾泰西人所論往々出于此。〔…〕⁽⁴⁸⁾

小楠は、志筑忠雄訳『鎖国論』について「天下之勢不唯我有眼者能知之彼泰西人既已知之乃如檢夫爾^{ケンフル}鎖国論」(「天下の勢、唯我のみならず、眼有る者、能く之を知る。彼の西人、既已に之を知る。乃ち檢夫爾^{ケンフル}の鎖国論の如し。')として、日本の地理的隔絶と士氣の剛勇さ、ならびに産物の豊富さなどが唱えられた文献であるとし、「我鎖国」が「卓越之見」とされている旨を紹介している。

(ホ) 万国における日本の優位性を説く典拠として

前節で志筑忠雄訳『鎖国論』が、世界における日本の優秀さを説いた文献として紹介された動きを見てきたが、ただに資料紹介にとどまるのみならず、自身の発言に利用していく動きが確認できる。

たとえば、平田篤胤による一連の著作に志筑忠雄訳『鎖国論』を利用した跡が窺える。「古道」や「御国魂」を平易かつ明瞭に説いた『古道大意』（文化八年「二八一」成、文政七年「二八二四」板行）、篤胤の宇宙観を著した『霊の真柱』上巻・下巻（文化九年「二八一」成立）、ならびに日本史の概説書的文獻『玉櫛』巻二（文化八年草稿成、文政七年「二八二四」増訂成）の中で『鎖国論』が自身の発言の典拠として持ち出されている。拙稿で論じたように、平田篤胤は、志筑忠雄訳『鎖国論』を西洋人ケンペルによる万国における日本の優位性を説いた資料であると解釈し、以降平田国学が受容されるとともに、篤胤の読み方および利用の仕方が、特に国学者を中心に広まり、彼らの中で万国における日本の優位性を説く際に引く基本文獻として定着した動きが認められた⁽⁴⁹⁾。『鎖国論』の篤胤的利用は、『霊の真柱』が成されて間もなく国学者鶴峯戊申（一七八八〜一八五九）の著作に認められる。

鶴峯戊申は、自身の宇宙観を唱えた『天の真はしら』（文政元年「二八一八」成、文政四年「二八二二」板行）で、平田篤胤『霊の真柱』における志筑忠雄訳『鎖国論』を引いた記述を、ほぼ変更しないまま自身の著作に用いている⁽⁵⁰⁾。また、後年著した『内密問答録』（弘化四年「一八四七」成。塩田順庵編『海防彙議』補卷五所収。）でも、志筑忠雄訳『鎖国論』から日本人が優れて仏神を敬う心を有していると述べられた箇所を引き、自身の発言に利用している。

又西洋人ケンフルと申ものの認候書に【鎖国論】、日本には別に教を用るに不及、神を敬し仏を信する事、自然に備はりたる由を讃歎致し候趣相見へ候。然は我国

神聖の立させ給ふ敬神の道は、天下に押渡たる大道にて御座候、今敬神の道を以て申さは、万事は皆神明の

知し召所也。故に君に不忠なれば天罰あり、親に不孝なれば冥罰有り、慈仁行届たる者は自ら冥加の余慶を蒙る事、譬へは高山の絶頂に上り、善人は鬼神是を救ひ、悪人をは鬼神是を罰するか如しと、安心を定め候我 神州の教にて御座候へは、何れの術か是に過可申哉。ケンフルか所見尤の儀に奉存候⁽⁵¹⁾

さて、平田篤胤門下で、明治維新に際し国学の理論的指導者として活躍した大國隆正（二七九二～一八七二）もまた、平田篤胤が志筑忠雄訳『鎖国論』を解釈し、日本賛美的資料として用いた方法と同じ仕方で、『鎖国論』を利用している⁽⁵²⁾。天保五年（一八三四）成立『鼻くらべのさうし』、天保七年（一八三六）成立『ことばのまさみち』、および天保七年頃成立と推定される『憐駁者』に認められる⁽⁵³⁾。同様に黒澤翁満、長澤伴雄、伴林光平といった三人の国学者も、平田国学を受容することで、志筑忠雄訳『鎖国論』の利用に至っている⁽⁵⁴⁾。薩摩藩士で歌人としても名が知れた八田知紀（一七九九～一八七三）は、随筆『桃岡雜記』（弘化三年「一八四六」刊）において、『鎖国論』に描かれた日本人の勇敢ぶりを引いて「皇国の武威万邦にかゞやきたる事」を唱えている。

ここに蘭人検夫爾^{ケンブル}と言へる者の言を訳したる鎖国論と云書に云。^(上略)^{底本ママ}、日本の地自然堅固にして、外寇の恐るべきもの究てなし。^(中略)^{底本ママ}、これ勇猛無敵の民俗、たゞその固有の君につかふるの外、未曾て他の命令を聞事なし。又云、日本人に一箇の氣象あり。我これを名付て胆氣とやいはん、英氣とやいはん、讐敵の為に打負たるの時、又は怨を得てむくゆる事あたはざるの時に望みて、精神泰然としてみづから強手を「強手は切腹也」加る事を難しとせず。その性命を軽賤する事かくのごとし。^(中略)^{底本ママ}、されば日本人をば、怯懦な

る支那人の末也とおもはんは、実に理に当らざる事とほし。(中略)、日本人の其大概をいはず、戦場にありて次第みだるゝ事なく、将帥の命をきゝては悦びすゝみて、其宜きを失ふ事なし、「∴」、日本人をば恐れおもんずべき事なるべし。(中略)、其子を育するにも、剛と勇とをもて第一なる重き教諭として、力を尽して幼心に銘刻するを以て心とせり云々、などいへるによりても、皇国の武威万邦にかゞやきたる事、また武の国体に預りて重き訳をも思ひしるべき也⁽⁵⁵⁾

これと同じように、幕末に精力的に海防書を著した長山樗園もまた、安政年間（一八五四～一八五九）に成った『海防私議』巻下において、『鎖国論』を典拠として日本人の勇敢さを説いている。

西洋人モ我国手詰ノ合戦ヲ恐ルゝトミへ、檢普爾ノ日本記録ニ、日本人ハ戦闘ニ勇ムノ烈シキ、自ラ好シテ危殆ノ地ニ当ランコトヲ欲ス、兵器ノ利一刀ニシテ人ヲ両断トストミへ、聖武記ニ、紅夷ノ日本ヲ恐ルゝハ岸上ノ陸戦を畏ル、故也ト云。手詰ニ至ルコトハ甚難キコト也⁽⁵⁶⁾

さて、蘭学者高野長英（一八〇四～五〇）は晩年、『兵制全書』（L. F. Geeling en J. J. Urbain: *Bilke op de militaire zamenstelling en sterkte der onderscheidene staten van Europa en werelddeelen*, 1830）の記事を、『知レ彼一助』（弘化四年「一八四七」序）の第一巻で内容整理し、第二巻で翻訳を行い、宇和島藩主伊達宗城に献上した。その第一巻にも志筑忠雄訳『鎖国論』についての言及が確認できる。

吾邦、四面環海、而シテ瀕海、暗礁・沙洲多ク、洋中時ニ颶風・狂波起ル。是レ地勢、自然ノ險ニシテ、其固キコト、長城・四分一宮ニ勝ルコト万々ニシテ、我邦ノ東海中ニ孤立シ、古ヨリ帝国トナルコトヲ得ル所以ナリ。而シテ、勝国以降、嚴ニ洋ヲ閉テ、外蕃ニ交接セズ。是ヲ以テ国益固ク、纖塵揚ラズ。民昇平ノ沢ニ浴スルコト、將ニ二百有五十年。然レドモ、閉洋鎖国ノ制ハ、富士・強国ニ非ザレバ、之ヲ行フコト能ハズ。【甘辺氏ノ書ニ出ヅ】是ヲ以テ西夷、竊カニ我邦ノ殷富を洞察シ、頗ル之ヲ羨望シテ、好和ヲ乞エ、貿易ヲ請フコト、已ニ数十次トス。官、後害ヲ慮リ、遺詔ヲ守リ、固ク之ヲ禁ジテ容レズ⁽⁵⁷⁾

「甘辺氏」とはケンペルのことで⁽⁵⁸⁾、記述の内容からここでケンペルの書とされているのは、『鎖国論』であることは明白である。幕府が「嚴ニ洋ヲ閉テ、外蕃ニ交接」しない政策を採り、「固ク之」「西夷」ヲ禁ジテ容レズ」にしていることを「閉洋鎖国ノ制」と表現しており、体制を表現する言葉として「鎖国」という言葉を特化し使用していることは注目すべきである⁽⁵⁹⁾。『鎖国論』を典拠として、日本が「富士・強国」であるから「閉洋鎖国ノ制」が採れるとしている。

二 志筑忠雄訳『鎖国論』が受容された背景についての考察

志筑忠雄訳『鎖国論』の利用方法は、上記のように五種認められた。中でも近世後期国学者における『鎖国論』の受容には、平田国学の受容との関連性が認められる。『古道大意』などにおいて平田篤胤が志筑忠雄訳『鎖国論』を西洋人ケンペルによる日本の優秀さを説く資料として用いたことから、（特に平田派の）国学者間に、万国に

における日本の優位性を説く際に読むべき、かつ利用すべき基本文献として、定型化されていた動きがあった。しかしながら、平田国学の受容との関連が認められる一派以外では、決まった読み方・用い方が確認できず、むしろ使い方が制約されない形で受容されたことが本稿から確認された。

だがいずれにせよ、百年以上古い情報源であった『鎖国論』が、なぜこれら利用の典拠になりうるのかという問題が残る。この問題について考察を加えていきたい。利用の典拠とされた背景として次の四つが考えられる。

(1) 『鎖国論』は志筑忠雄訳ではなく、ケンペル著書としての側面が重視された。高度な科学力、知識、武力を持つと見なされている西洋人が著した「蘭書」の記述は、信憑性の高い事実として利用しうる資料であり、黒澤翁満のいうように「是は蘭人のいへることなれば、疑ふ者なく、此上もなき証拠にして、(御国の勝れて強く尊く、万の国に秀たる事を、今の人に悟らしむるには、) 此証拠に及もの⁽⁶¹⁾」がない典拠として持ち出せる資料であった⁽⁶¹⁾。

(2) 特に世界における日本の優秀さを説く際に用いられた背景として考えられることとしては、西洋の侵入・氾濫によつて国が乱される同時代(十九世紀前半～中盤)の国内状況が、志筑忠雄訳『鎖国論』に描かれた「島原の乱」の状況と酷似していたことが挙げられる。つまり日本が「西洋」に浸食されている現状は、最終的に南蛮人を追放し平和を回復した、先例としての「島原の乱」に鑑みることができ、歴史資料として非常に好都合であった⁽⁶²⁾。

(3) 前に掲げた岡部春平『淤能碁呂島考』において、春平は志筑忠雄訳『鎖国論』を日本賛美的書物であると紹介した上で、桓武天皇の御代において、坂上田村麿が「韃靼入寇の賊」を「塵に」したことが描かれている旨を採り上げている。これは日本が過去に異国を撃退した歴史的事例である

ところで、いわゆる排外的主張を唱えた水戸学者会澤正志斎（一七八二～一八六三）の『新論』（文政八年「二八二五」成）および『迪彝篇』（天保四年「二八三三」成）をみてみよう。

国家の興隆するや、天も亦之を保佑す。故に時に島原の賊起つて、天下の邪徒を一城に聚むることあるも、一掃して之を殲くし、余燼の再燃するを得ざるもの、実に之に由るなり。是の時に当り、西夷の妖教を唱ふる、甚だ力む。「…」是に於いてか夷輩の胆落ち、相告げて曰く、日本人に三眼ありと。国威の海外に震ふ亦、快と称するに足れり⁽⁶³⁾

神聖の君、暴悪を懲さん為に、武衛を奮ひて四夷を征伐し給ふ。「…」崇神天皇の御時、道主を四方に遣し四方を経営せしめ、皇子豊城命をして、東国を治めし給ふ。此御時、任那の国朝貢す。これ三韓朝貢せし初めなり。「…」齐明天皇の御時には、阿倍比羅夫をして東夷を巡撫せしめ肅慎を征伐す。織田殿は本より聡明絶倫なれば、狡夷の強いて民心を悦ばしめんとせしを見て、其の邪心ある事を悟り、尽く邪徒を禁断せんとせしが、程なく下世をされければ、豊臣家興りて、遂に邪徒を海外へ逐ひ斥けたり。東照宮、天下を治め給ひては、益々嚴禁を設けて邪法の源を絶ち、流れを塞ぎ給ふ。明正天皇の御時に至りて、肥前島原の邪徒蜂起しけれども、大猷公、諸将を遣して征伐せしめ、数万の邪徒会聚して一城に籠りしを、大軍を以て打ち圍み一時に打ち盡されたり。是よりして天下の邪徒の種と絶ちし事、実に赫々たる神明の威霊にして、生民の大幸といふべし。長に依て国威海外に輝き、前にも挙げし如く、日本人三眼ありとて、蛮夷も舌を震ひ、渡海し來る者も、長崎を見ては股慄きしも、細戈千足の余光にあらずや⁽⁶⁴⁾

このように、いわゆる排外派の著述においては三韓征伐、秀吉の朝鮮出兵、島原の乱など外国を撃退した歴史的事例を用いて、「武力の優越」による、世界における日本の優秀性を説く手法を用いることは珍しくはなかった。志筑忠雄訳『鎖国論』には「島原の乱」に加え、その他元寇や濱田兄弟が台湾総督を撃退した事例も収録され、つまり過去に日本へ侵入を試みた異国を撃退した歴史的事例が掲載されている。「島原の乱」や「濱田兄弟」の事例は、三韓征伐などより遙かに近い時代に行われた現実味のある歴史事例であり、異国に対する日本の優越性や不可侵性を説く際、資料的に非常に好都合な文献であった。

(4) 国学者はしばしば無垢なる過去の日本に理想郷を見出した⁽⁶⁵⁾。「復古主義」思想を有する彼らにとつては、前に掲げた黒澤翁満の記述に認められるように、西洋風に侵された現状を純粋な日本に戻すよう世に諭すことこそが最重要課題であり、典拠の情報の最新性が問題なのではなかった。『鎖国論』には「和魂」に満ちた理想的な日本の姿が描出されており、それらを説く資料として適当であった。

おわりに

近世後期の日本で志筑忠雄訳『鎖国論』写本は流布し読み継がれた。『鎖国論』はその題名と内容のためか従来「鎖国」の根拠、あるいは「攘夷」の典拠とされたとしばしば言及されてきたが、筆者の一連の調査ではそのような用いられ方は確認できなかった。

『鎖国論』は志筑忠雄本としてではなく、西洋人ケンペルによつて著された側面が重視されることが多く⁽⁶⁶⁾、その利用方法は天文学・歴史・海外の日本観などの情報源、もしくは日本賛美書として、あるいは日本の優位性

を説く際の典拠として用いられたことが、本稿によって明らかになった。しかしこの時「鎖国」という言葉のみが特化され、近世日本の体制を表現するような言辞として用いられるのは例外的な現象であった。いいかえれば、「鎖国」という言葉の淵源である志筑忠雄訳『鎖国論』の普及は、ただちに「鎖国」という概念の普及につながったわけではなく、「鎖国」という語彙を潜在的に広めたにとどまったと推察される。

また、管見の限り志筑忠雄訳『鎖国論』の受容は、その多くが政策に関わりのない人物の間で行われ、政策決定者に利用された跡がほとんど認められなかった⁽⁶⁷⁾。この理由は定かでないが、緊急に差し迫った外交時に医学、軍事科学、百科全書などの実効性および即効性の高い蘭書を重視した政策決定者にとつては、百年以上古い情報源である『鎖国論』を受容する意味が希薄であつた、などの理由が推測される。開港そしてハリス (Townsend Harris, 一八〇四～一八七八) 来航以後、幕閣の中で「鎖国」という言葉が特化された形でだんだん用いられるようになるが⁽⁶⁸⁾、近世日本を「鎖国」体制とする概念が普及し定着する時点、いわば「鎖国」が言説として本格的に形成されるのは、近代以降に俟たなければならない。

註

(1) 最近のいわゆる「鎖国」体制の研究としては、加藤榮一『幕藩制国家の形成と外国貿易』(校倉書房、一九九三年)。永積洋子編『「鎖国」を見直す』(山川出版社、一九九五年)。山本博文『鎖国と海禁の時代』(校倉書房、一九九五年)。荒野泰典『近世日本と東アジア』(東京大学出版会、一九八八年)、『海禁と鎖国』(荒野泰典、石井正敏、村井章介編『外交と戦争』、東京大学出版会、一九九二年所収)、『東アジアのなかの日本開国』(田中彰編『明治維新』、吉川弘文館、一九九四年所収)。川勝平太編『「鎖国」を開く』

(同文館、二〇〇〇年)、川勝平太『文明の海洋史観』（中央公論社、一九九七年）。紙屋敦之・木村直也編『海禁と鎖国』（東京堂出版、二〇〇四年）などがある。膨大な「鎖国」体制研究史の中にあって、近世期を「鎖国」体制ではなく、「海禁」政策と東アジアの華夷秩序とによって捉えなおすことを主唱した荒野泰典の見解が現在有力である。

(2) 「鎖国」という言葉が志筑忠雄訳『鎖国論』によって誕生したことを指摘したのは、板澤武雄「鎖国及び「鎖国論」について」（『明治文化研究論叢』、一元社、東京、一九三四年所収）である。

(3) 『鎖国論』は写本であるが、『』を使って表記する。その他の写本についても同。

(4) 高須芳次郎「ケンペルの『鎖国論』と平田篤胤」（『国学院雑誌』第三八巻九号、一九三二年所収）。

(5) 前掲板澤武雄「鎖国及び「鎖国論」について」。

(6) 小堀桂一郎『鎖国の思想 ケンペルの世界史的使命』（中央公論社、東京、一九七四年）、一四六～一六二頁。

(7) 河原宏「鎖国論の系譜」（『人文社会科学研究』第三〇号、一九九〇年所収）。

(8) 岸本覚「「鎖国」観の形成と海防論—ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』を題材として—」（『日本思想史研究会会報』第十三号、一九九五年所収）。

(9) Hiraishi Naoki: E. Kaempfer's treatise on Japan's policy of seclusion and its influence on Japan's decision to open the country; Some reflections concerning Mori Ōgai's historical novel, *Japonica Humboldtiana* 3, Humboldt Universität zu Berlin, 1999. 平石直昭「「鎖国論」と日本の開国」（川勝平太編著『鎖国』を開く、同文館、東京、二〇〇〇年所収）。

(10) 山崎勝昭「ケンペル『鎖国論』（志筑忠雄訳）の波紋」（『葎』第八号、二〇〇二年所収）。なお、本稿は山

崎の仕事を土台としている。

- (11) 拙稿『異人恐怖伝』に見られる国学者黒沢翁満の『鎖国論』受容』（『日本文藝研究』第五六卷二号、二〇〇四年所収）。
- (12) 拙稿「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学」（『日本文藝研究』第五七卷一号、二〇〇五年所収）。
- (13) Kaempfer, Engelbert: *Amoenitatum Exoticarum politico-physico-mediarum, quibus continentur variae relationes, observationes et descriptiones rerum Persicarum et ulterioris Asiae, multa attentione, in peregrinationibus per universum Orientem. collectae ab auctore Engelberto Kaempfero. Fasciculi V. Lemgoviae, 1712.* (通常は *Amoenitates Exoticae*)。フーナキヌースで、reprinted edition, printed and bound at the Twenty-Fifth Shahriar Printing House by the Offset Pres, Inc., Tehran, 1976. を用いる。フー *Amoenitates Exoticae* (1976) とする。
- (14) 翻訳は、原田祐司『鎖国論』の訳者志筑忠雄のラテン語辞書』（『言語文化研究』第二五号、大阪大学、一九九九年）、一二二頁による。
- (15) Kaempfer, Engelbert: *The History of Japan*. translated by Johann Caspar Scheuchzer, London, 1727. なお、ケンペル『日本誌』の原典批判版として、Kaempfer, Engelbert: *Werk*, 1/1; 1/2 *Heutiges Japan* / hrsg. von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel, Iudicium Verlag, München, 2001. がある。
- (16) 表題は、An Enquiry, whether it be conducive for the good of the Japanese Empire, to keep shut it up, as it now is, and not to suffer its inhabitance to have any Commerce with foreign nations, either at home or abroad. (＝曰本帝国にとって、今のまま自国民に外国とのいかなる交易をもさせないことが有益か否かの探求。) 筆者拙

訳。

- (17) Geschichte und Beschreibung von Japan, herausgegeben von Christian Wilhelm Dohm, Lemgo, 1777-79.
- (18) Kapiza, Peter: *Engelbert Kaempfer und die Europäische Aufklärung*. Iudicium Verlag, München, 2001. ヌライナー・ヨーゼフ「ケンペルとヨーロッパの日本観」(国立民族学博物館、ドイツ日本研究所編『ケンペル展 ドイツ人の見た元禄時代』、国立民族学博物館、吹田、一九九一年所収) 参照。
- (19) Kaempfer, Engelbert: *De beschryving van Japan*, Amsterdam, 1729, reprint Amsterdam and den Haag, 1733. なお、志筑忠雄が用いた底本は一七三三年再版である。
- (20) 蘭語版『日本誌』『鎖国論』の原題は、Onderzoek, of het vanbelang is voort Ryk van Japan om het zelve geslooten te houden, gelyk het nu is, en aan desselfs Inwooners niet toe te laten Koophandel te dryven met nytheemse Natient zy binnen of buyten's Lands. これは、志筑忠雄訳『鎖国論』の内題「今の日本人全国を鎖して、国民をして国中国外に限らず、敢て異域の人と通商せざらしむる事実に、所益なるに与れりや否やの論」として翻訳されている。(中野柳圃訳、内藤耻叟校訂『鎖国論』(『少年必読日本文庫』第五編(博文館、東京、一八九一年所収)、三五七頁。なお、引用する資料に句読点が不在の場合は、便宜上適宜筆者が付した。以下同。
- (21) *Amoenitates Exoticae* (1976), pp.478-481.
- (22) *Amoenitates Exoticae* (1976), pp.481-486.
- (23) *Amoenitates Exoticae* (1976), pp.486-491.
- (24) *Amoenitates Exoticae* (1976), pp.491-501.

(25) *Amoenitates Exoticae* (1976), pp.501-502.

(26) 前掲拙稿「十九世紀国学者における志筑忠雄記『鎖国論』の受容と平田国学」、四〇〇～四八頁参照。

(27) 鳥井裕美子は、志筑忠雄が蘭語原文を翻訳した際、原文を見事に翻訳する傍らで、志筑が意図的に自身の価値基準に基づいた小文や註釈を加筆することで、ケンペル著書を日本讚美論から排外的な内容へ変質させたと論じた。この指摘によって志筑忠雄の思想の一端が窺えるようになった。ただし管見の限り、註釈などの付記で記されている事柄の大部分は、ケンペルの記述に関する補足説明や誤りの訂正であり、志筑の主観が反映されている部分はそれほど多くはない。鳥井裕美子「ケンペルから志筑へ―日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容―」（『季刊 日本思想史』第四七号、一九九六年所収）。

(28) 松崎慊堂『慊堂日曆』一（平凡社、東京、一九七〇年）、一一一頁。以下、引用文の表記は常用漢字で記す。なお、以下全ての引用文について、その闕字、平出、虫喰い、ルビなどの表記は、出典としたものの表記に従う。

(29) 『近藤正斎全集』第一卷（国書刊行会、東京、一九〇五年）、四一頁。なお、【一】内の記述は割注内の記述を示す。以下、全ての引用文で同。

(30) 広瀬旭荘『九桂草堂随筆』卷之三（『廣瀬旭荘全集』第一二卷随筆編、思文閣出版、京都、一九八六年所収）、五七頁。なお、筆者が或る単語や文章に付している傍点および○は全て傍点で表した

(31) 広瀬旭荘『九桂草堂随筆』卷之六（前掲『廣瀬旭荘全集』随筆編）、一一一頁。

(32) 『国書人名辞典』（岩波書店、東京、一九九三～一九九九年）参照。

(33) 石黒千尋『近世諸蕃来舶集』（石黒五十二による一九〇六年序複製本）卷之一、三三丁裏～三四丁表。本文

中に石黒五十二が付したコメントは全て廃した。

- (34) その他『近世諸蕃来舶集』の四丁表く五丁表では、十七世紀のポルトガル、オランダをはじめとする日本と外国との貿易事情の歴史についての典拠として『鎖国論』を利用している。また、成立年不明の『来舶神旨』巻之一（石黒五十二による一九〇六年序複製本）、一八丁裏く二三丁裏でも『鎖国論』を歴史資料として使用している。

- (35) 井田清子「ケンペル『鎖国論』写本を読み継いだ人々」（『思想』八〇〇号、岩波書店、東京、一九九一年所収）の末尾に付された一覧表（四四く五十頁）を参照。

- (36) 前掲井田清子「ケンペル『鎖国論』写本を読み継いだ人々」、三四く三五頁参照。

- (37) 『大田南畝全集』第六卷（岩波書店、東京、一九八八年）、二五四く二五五頁。

- (38) 松平定信『秘録大要』（『春の心』、楽翁公二百年記念大祭協賛会、三重、一九二八年所収）、三頁。

- (39) 井澤蘭軒『客先随筆』（国立国会図書館蔵）、六丁表。

- (40) 山崎美成『海録 全』（国書刊行会、東京、一九一五年）、三六八頁。

- (41) この情報は、筆者が二〇〇四年度洋学史学会大会で報告した席において、京都大学大学院松田清教授が教示してくださったものである。

- (42) 植田啓子「曲亭馬琴の対外関心について」（『言語と文芸』第四二号、一九六五年所収）参照。また、播本眞一は、現存する馬琴旧蔵写本とその転写本について紹介した。播本眞一「曲亭馬琴伝記小攷」（読本研究の会編『読本研究新集』第二集、翰林書房、東京、二〇〇〇年所収）。

- (43) 『日本芸林叢書』第九卷（六合館、東京、一九二九年）、一〇六頁。

- (44) 山片蟠桃『夢の代』（『日本思想大系 四三』、岩波書店、東京、一九七三年所収）、二六五頁。
- (45) 中山美石『船長日記』跋文（山下恒夫再編『石井研堂コレクション 江戸漂流記総集』第三巻、日本評論社、東京、一九九二年所収）、三六五頁。
- (46) 岡部春平『禁秘響』（大阪府立中之島図書館蔵）、一二丁表裏。
- (47) 岡部春平『淤能碁呂島考』（『百家叢説』第二編、国書出版協会、東京、一九一二年所収）、一七〇一八頁。
- (48) 山崎正董『横井小楠遺稿』（白新書院、東京、一九四二年）、六九二〜六九三頁。訓点およびルビ以外の付点は全て省いた。
- (49) 前掲拙稿「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学」参照。
- (50) 前掲拙稿「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学」、五四〜五五頁。
- (51) 鶴峯戊申『内密問答録』（住田正一編『日本海防史料叢書』第五巻、海防史料刊行会、東京、一九三三年所収）、八一頁。
- (52) 前掲拙稿「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学」、五五〜五六頁。
- (53) 前掲山崎勝昭「ケンペル『鎖国論』（志筑忠雄訳）の波紋」参照。
- (54) 前掲拙稿「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国論』の受容と平田国学」、四九〜五〇、五六〜五八頁。
- (55) 八田知紀『桃岡随筆』（『日本随筆大成』第三期六巻、日本随筆大成刊行会、東京、一九三〇年所収）、七八六〜七八七頁。
- (56) 長沼貫『海防私儀』巻下（住田正一編『日本海防史料叢書』第八巻、海防史料刊行会、東京、一九三三年所収）、一七三〜一七四頁。

(57) 高野長英『知レ彼一助』巻之一（佐藤昌介校注『華山・長英論集』、岩波書店、東京、一九九九年第三刷所収）、二四四頁。

(58) 前掲高野長英『知レ彼一助』文末脚注、三五二頁。

(59) その他近世期に「鎖国」という言葉を特化させて用いた例としては、嘉永元（一八四八）自序山鹿素水『海備全策』があり、本書の第一巻の前節は「鎖国之大意」と名づけられている。（住田正一編『日本海防史料叢書』第一巻、東洋堂、東京、一九四三年、一七五～一八五頁。）次に、嘉永癸丑（一八五三）覚世道人の序が付された『鎖国論附尾』という木活字本翻訳書もある。ただしこの本はケンペル著書とは関係がない。また、長澤伴雄『挫夷本論』（国立国会図書館蔵。嘉永六年「一八五三」成、安政元年「一八五四」大江延年跋。）、三〇丁裏～三一丁表、および前掲横井小楠『読鎖国論』などにも確認できる。しかしながら、同時代の体制の表現として「鎖国」を用いている例は極めて少なく、一般的には「御制禁」・「国禁」・「海禁」などの言葉で表現されている。

(60) 『異人恐怖伝』、二二六頁。なお、括弧は筆者が付した。（文明源流叢書版）。

(61) 前掲拙稿「『異人恐怖伝』に見られる国学者黒沢翁満の『鎖国論』受容」、三〇～三一頁。

(62) 前掲拙稿「『異人恐怖伝』に見られる国学者黒沢翁満の『鎖国論』受容」、二七～二八頁。

(63) 会澤正志斎『新論』（高須芳次郎編『会澤正志斎集』「水戸学全集 第二編」、日東書院、東京、一九三三年所収）、八一～八二頁。

(64) 会澤正志斎『迪彝篇』「奮武六」（前掲『会澤正志斎集』所収）、三八三～三八九頁。

(65) 竹岡勝也『近世復古思想』（教学局、東京、一九三九年）。村岡典嗣『日本思想史研究』（増訂版、岩波書店、

東京、一九四〇年)。Nosco, Peter: *Remembering paradise: nativism and nostalgia in eighteenth-century Japan*, Council on East Asian Studies, Harvard University, Distributed by Harvard University Press, Cambridge, Mass, 1990. など参照。

(66) 前掲岸本覚「鎖国」観の形成と海防論—ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』を題材として—」参照。

(67) 本文で掲げた人物の中では松平定信のみが政策決定権を握る立場にあった。ただし『秘録大要』執筆時既に老中を退き、幕政から離れた白河藩で政治に専念していた。定信は『鎖国論』に言及しているものの、『鎖国論』を政策や自身の主唱に用いた様子はない。また、原典である蘭語版『日本誌』は幕府や薩摩が頻繁に購入しているが、政策決定権を握る階層にある人物が『鎖国論』を発言の典拠に利用した例は、筆者の調査の限りまだ見つからない。蘭書の輸入については、永積洋子『18世紀の蘭書注文とその流布』(坂戸、一九九八年) 参照。

(68) 前掲荒野泰典「海禁と鎖国」、二二二—二三頁。藤田覚『近世後期政治史と対外関係』(東京大学出版会、東京、二〇〇五年) 参照。

【付記】本稿は、二〇〇四年十二月十一日—十二日にかけて開催された二〇〇四年度洋学史学会大会の第二日目に報告した「近世後期日本におけるケンペル『鎖国論』の受容」を補訂し成されたものである。なお、本稿は成稿に至るまで九州大学大学院W・ミヒエル教授のご指導を仰いだ。また、京都大学大学院松田清教授にも貴重な資料および情報提供をいただいた。ここに記して感謝の意としたい。

おおしま あきひで (九州大学大学院)

Acceptance of “Sakoku-ron” translated by Shizuki Tadao in latter half of early modern times Japan

Akhide OSHIMA

The manuscript “Sakoku-ron” was original written by Engelbert Kaempfer, and then translated by Shizuki Tadao in Japan of 1801 and became a source of the word ‘Sakoku’ (National Seclusion). ‘Sakoku’ in Japan, was expressed in the modern period, and was used as a means to seal off the country. “Sakoku-ron” spread and became widely read mainly by intellectuals and wielded great influence in the modern period. However, it has been noted that in previous conventional studies, “Sakoku-ron” as translated by Shizuki Tadao was received as the theoretical authority for ‘Sakoku’ and ‘Kokoku’ (nationalism). Yet, there have been no studies which have investigated in detail how “Sakoku-ron” was received in Japan's latter period.

The main purpose of this paper is to take a detailed look at how “Sakoku-ron” as translated by Shizuki Tadao was accepted, as well as an analysis of the discursive spread of ‘Sakoku’. After the formation of this concept, “Sakoku-ron” was absorbed by writers, scholars and government officials, yet it was not Shizuki Tadao's translation, rather it was Engelbert Kaempfer's book that was given precedence. In this context there are five main ways in which Shizuki Tadao's work was interpreted.

The work was taken as a authoritative body in the five following areas: 1. as a source of astronomical knowledge as

written by Matsuzaki Kodo a book collector. 2. As historical material used by Shomotsu-bugyo Kondo Seisai. 3. As a source of information to inform Japan's way of understanding the outside world as described by the writer Ota Nanbo. 4. As a source of information to praise foreigners as commented by the Nationalist Nakayama Umashi. 5. As an authority source of information used to preach Japanese superiority as seen with the Nationalist Hirata Atsutane. It was through the acceptance of 'the Hirata school' that "Sakoku-ron" was accepted between Academics.

In other words (1) of astronomical knowledge as Matsuzaki Kodo, A book collector, wrote it down, (2) of a historical document as Shomotsu-bugyo Kondo Seisai, (3) as the source of information to know outlook on Japan of a foreigner as writer Ota Nanbo wrote it down, (4) as Japanese praise theory of a foreigner as Nationalist Nakayama Umashi, (5) as authority to preach Japanese superiority in all countries as Nationalist Hirata Atsutane. "Sakoku-ron" was received between Nationalists in latter half of Japan with accept of the Hirata study of ancient Japanese thought and culture.

The following four points are taken as the background for "Sakoku-ron" which has been a source of information for more than 100 years. Firstly, it is possible to say that Dutch books (with a high degree of factuality) were "Sakoku-ron". Secondly external foreign pressure closely resembling the 'Shimabara uprising' was used to describe "Sakoku-ron". Thirdly the 'Mongolia invasion', 'Shimabara uprising' and 'the Hamada brothers' have been used as examples to bolster "sakoku-ron". Finally, "Sakoku-ron" was idealized by Japan as 'Yamato damashii' to induce reactionism.